

# 月刊 地域支え合い情報

[2018年6月20日発行]

本体 286円+税

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



同じ時間を共有し、音楽に耳を傾けるよるこび(すがとよ酒店/詳しくは7頁へ)

## 特集

## このまちを照らすのは あなた

- 「いつも明るいまちに」。  
住民主体で防犯・防災に取り組む ③  
八幡下二地区防犯協会(宮城県多賀城市)
- 路上からの生活再建を応援 ⑤  
特定非営利活動法人仙台夜まわりグループ(宮城県仙台市宮城野区)
- 鹿折に明かりを灯す  
酒店2階のミニホール ⑦  
すがとよ酒店(宮城県気仙沼市)

☆専門家に聞く地域づくりのヒント  
(山梨県立大学 人間福祉学部 教授 下村 幸仁さん)

### 東北の元気 ⑨

かほくベルリンガーズ・アンダンテ(宮城県石巻市)

### 平成30年度宮城県サポートセンター支援事務所の活動 ⑩

#### どこでもサロン ⑪ ⑫

大般若講(福島県猪苗代町・会津若松市)  
紅枝垂地蔵桜保存会(福島県郡山市)

### まじわる災害公営住宅 ⑬ ⑭

荒井東ゲートボール愛好会(宮城県仙台市若林区)

### 宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ ⑮

### 暮らしを支える支援員 ⑯ ⑰

一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム  
(宮城県仙台市宮城野区)

特 集

# このまちを 照らすのは あなた

学校や仕事など、日中の予定を終え、家に帰り、ベッドのなかでまぶたを閉じる。

誰かがそうして過ごす頃、

まちのどこかで、誰かと誰かがつながりを育んでいます。

通学路のパトロールなどをおして、

下校する児童などの安全確保、

地域の治安維持に努める、

住民主体の防犯組織。

主婦、仕事終わりのサラリーマン、

学生などと一緒に夜まわりをし、

路上生活している人たちへ軽食を配りながら生活状況を伺う支援団体。

震災後に再建した店舗を活用して、

近隣の災害公営住宅入居者など、

周囲の人たちが集い、にぎやかに過ごす夜を設ける個人商店。

陽が沈んでも、「あなた」と身近な人や気になる人が、

顔を合わせ、声をかけ合っているだけ、

気持ちも暮らしも、安心・安全で、より明るいものになります。





下校中の子どもたちにあいさつ、ハイタッチを交わす見守り隊。  
オレンジの服装が薄暗い夕方にも鮮やかに映る

## 「いつも明るいまちに」。住民主体で防犯・防災に取り組む

◎八幡下二地区防犯協会（宮城県多賀城市）

### ポイント

- 下校中に通学路に立つことで、子どもたちの安全を見守るとともに、犯罪の芽を事前に摘む
- サロンなどの住民が集まる機会を活用して、正しい防犯・防災知識の普及啓発を行う。学校や警察、町内会役員、民生・児童委員など関係団体との連携もたいせつにする

### 子どもを守る 防犯見守り隊の取り組み

毎週水曜日の午後3時

歩行中の小学生の死傷者数は、午後3時台から4時台の時間帯が最も多い。子どもたちが下校するこの時間帯は、車の交通量が増える一方で、ドライバーの判断力や集中力が低下する時間帯ともいわれる。冬場はあたりも薄暗くなる。登校時と比べて人目が行き届きにくいいため、子どもが狙われる事件もあとを立たない。

痛ましい子どもたちの事故・事件を未然に防ぐために、全国各地で、住民による自主的な見守り・見守り活動がさかんに行われている。

宮城県多賀城市八幡地区にも、住民が構成する防犯組織がある。そのうちのひとつ「八幡下二地区防犯協会」は、下校中の子どもたちにあいさつ・声かけを行う「防犯見守り隊」の活動を通じて、安全確保・交通事故防止に努めている。

から4時頃まで、防犯協会の会員と八幡地区の町内会会員が三人一組で、八幡小学校の通学路に立つ。「さようなら」気をつけてね」と児童に声をかけながら、巡回する。大きな声であいさつを返す子もいれば、照れて下を向く子もいるが、皆表情はにこやかに見える。すっかり顔なじみになり、話しかけてくる子も多い。

保護者も、「学校の行き帰りが心配だから、こうやって見守ってくれて安心です。ありがたいですよ。地域を見守ってくれている。子どもたちもそれをわかっていると思います」と見守り隊の活動に感謝している。

「犯罪がおこらないように、心がけて」「防犯協会部長の岡崎貞敏さんたちは、パトロールしている。不審な人物を見かけるな」としたら、学校と警察への連絡対応をとるが、見守りの効果もあって、これまでそうしたケースは出ていない。

見守りに立つうえで、たいせつなことは何か。

八幡下二地区防犯協会／八幡地区防犯協会

会長 鈴木那彦さん

「街路灯と集会所が常に明るいまちに」



それは服装だ。協会員は「TBP（多賀城の防犯見守り隊の略）」と書かれたオレンジ色のジャンパーとキャップを着用して巡回する。「犯人から子どもを守るためにも、とにかく目立つ服装でいる。見守り隊が立っていることが印象づくると、『あそこは犯罪がでない』となるから」と岡崎さんはねらいを話す。この人目を引く服装が、犯罪の抑止力になり、子どもや保護者にとっては安心の象徴になる。

また、巡回をしながら、街路灯が切れかかっているないかもチェックしている。八幡下二地区防犯協会会長の鈴木那彦さんは、「街路灯と集会所が暗いとまちは良くないですから」と防犯活動の先に、まちづくりも見据える。「子どもにもよろこんでもらえる地域にしたい」と思いを語る。

こうした見守り隊の活動に加えて、会長の鈴木さんが、毎日地区内を軽トラックで巡回している。見守り隊の活動とあわせて、「地域の目」が張り巡らされているのだ。



八幡下二集会所。津波で全壊も、13年に新築され、以降地域の活動拠点に

防犯・防災のために  
地域に多様な働きかけ

同防犯協会は、見守りのほかに、地域の防犯・防災のために、振り込め詐欺の注意喚起や防犯講話の開催、多賀城市の総合防災訓練への参加といった活動を行っている。振り込め詐欺は高齢者の被害が多いことから、

年金の支給日に、地区内の銀行などで、住民にチラシを配って注意を呼びかけている。

防犯講話は、防犯協会を通じて、警察関係者などに依頼。サロンや夏祭りなどが開催される時期にあわせて、定期的に講話を開いている。住民が

集まる機会を活かし、身を守るための正しい防犯知識を周知する。

市の総合防災訓練は、年一回、多賀城市総務部交通防災課や防災関係機関、地域住民が一体となって行っている。東日本大震災の教訓を活かして、津波避難訓練やシェイクアウト訓練（災害発生時に身を守るための動作訓練）などを行っている。

八幡地区でも、各防犯協会が、地区の小・中学校や町内会、民生・児童委員らと一緒に、避難訓練や防災学習を行っている。このように、防犯協会、学校など関係機関との連携も密にしながら、地域の防犯・防災体制を整えている。

八幡地区一丸となって

多賀城市八幡地区には、下二・下二・上二・上二の沖の5つの行政区があり、それぞれに防犯協会がある。かつては、5区を統括する「八幡地区防犯協会」の活動もさかんに行われていた。しかし、東

日本大震災後は、被害対応もあって、個々の区の活動が中心になっている。

震災時、八幡地区は津波による浸水被害が大きかった。当時から八幡地区防犯協会の会長と下二地区の区長を務めていた鈴木さんは、震災翌日から避難所に通って、住民の状況を把握。自衛隊や市役所職員、八幡5区の区長とも連絡を取り合い、食糧や水などの支援を行った。また、鈴木さんは、日本赤十字社宮城県支部多賀城市地区奉仕団第8分団長として、ボランティアの受け入れ窓口を担い、泥かきなどの支援活動の旗振り役となった。

「被災体験を共有するのが大事」と鈴木さん。防犯協会の活動を通じて、住民同士正しい知識を身につけ、震災体験を次代に継承し、いざという時の災害にも備えている。

今年4月19日には、5地区の防犯協会会長による会合が開かれた。八幡地区防犯協会の再始動に向けて、地区一丸となっている。

田



DATA

特定非営利活動法人  
仙台夜まわりグループ

〒983-0044

宮城県仙台市宮城野区宮千代2丁目10-12

仙台喜望の家1階

TEL / FAX 022-783-3123

HP <http://www.yomawari.net/>



仙台駅に集合して夜まわりに向かうスタッフ・ボランティア

## 路上からの生活再建を応援

◎特定非営利活動法人仙台夜まわりグループ(宮城県仙台市宮城野区)

### ポイント

- 路上生活者とふれあいを重ね、理解を深める
- ボランティアとして誰でも参加でき、協力して、より明るい地域づくりに

月2回、平日の午後8時に仙台駅駐車場に、「特定非営利活動法人仙台夜まわりグループ」のスタッフとボランティアが10人前後集まる。3組に分かれ車も使い、公園や地下通路など、市内数か所を回り、路上や車上で寝泊まりしている人たちを訪ねる。

インスタントの味噌汁をつくり、ゆで卵、バナナ、おにぎりなどと一緒に配る。夜まわりは、軽食を提供するほか、近況を聞いたり、相談にのったり、安否確認するためのコミュニケーションの最前線だ。

活動の始まりは、2000年1月。現理事長の今井誠二さん、現事務局長の青木康弘さん夫婦の3人が、路上生活者している高齢者たちと出会った。雪の上に段ボールを1枚敷いて眠らざるを得ない人がいるのを見て、味噌汁などを用意してその高齢者たちを毎週訪ねるようになった。

当時は仙台市中心に300人ほどの路上生

活者がいて、公園など野宿に適している場所を、何か所も何度も回って、路上生活者を探し、顔なじみになっていった。何年も続けるうち、夜まわりの日程に合わせて、路上生活者がいくつもの特定の場合に集まるようになっていった。ボランティアも、学生や主婦、サラリーマンなど、さまざまな人が参加している。

路上で生活する人たちには、病気による体調不良や発達障害などで仕事を続けることができなかったり、食事と寮付きの仕事を長く続けていて、それが途絶えて行き場がなくなったり、さまざまな背景がある。東日本大震災が契機になった人たちも多い。

現在、市内で確認されている路上生活者は100人ほど。一晩の夜まわりで30人ほどの路上生活者と顔を合わせている。スタッフは、これまでに顔なじみになった人たちのことは、名前や年齢、出身地などもおおよそ把握している。路上生活者も

特定非営利活動法人仙台夜まわりグループ

理事長 今井 誠二さん

「夜まわりは、路上や不安定居住下で生活している人たちとの大事なコンタクトの機会」

スタッフたちと親しげに話し、互いに笑顔を見せたりする。

さまざまな「ホームレス」

路上で生活し、自分の身を守るために、あえて近寄りたがたい風貌、振る舞いをする人もいるが、仙台の路上生活者の多くは、周囲を汚したり、通行人などへむやみに危害を加えたりはしない。夜まわりや炊き出しの現場でも、身なりからはスタッフと路上生活者を判別できないほどだ。共助精神も高く、食糧を分け合ったりするほか、新たに路上生活せざるを得なくなった人を見つければ、「いつ、どこに行く」と食糧がもらえるか」などの情報を共有したり、支援団体につなげたりもしている。

東日本大震災発生直後は、被災した人のために各地で炊き出しが行われた。その際、ふだんからライフラインの無い生活に慣れている路上生活者たちが、はじめて炊き出しに集まった屋根の下にいる市民たちへ食事を配ったり、列を整備したり、運営

に協力することもあった。

福島第一原子力発電所の事故を受けての福島県での除染作業や、建設などの復興関連の仕事に就こうとして、震災後に県内外から仙台市に集まってきた人も大勢いる。しかし、就職できなかったり、継続的に働けなかったり、悪質な業者から不当な待遇を受けた人たちもいる。また、発達障害があつて、地元の漁村・農村で地域の一員として仕事をできていたものの、震災によってその地域が被災し、仕事と居場所を失ってしまった人や、避難所・仮設住宅の環境になじめず、仙台市街に仕事を求めてきた人も少なからずいたという。

再建・自立までの道を照らす

いま特に心配しているのが、インターネットカフェなどを泊まり歩く人

たち。携帯電話を片手に派遣の仕事などをしながら収入を得る人もいるが、頼れる人間関係をもたず、不安定居住下で不安定就労を続けていることがほとんどだという。

ネットカフェを利用できなくなる頃には、状況がとことん悪化している。同グループでは、ネットカフェにも目を向け、気になる人へ生活状況の聞き取りを行うなどして、生活に困っている人がいち早く再建に向かえるように働きかけようとしている。

路上などで生活している人たちは、特定の住所や身分証明書、保証人などが無いことで、住居の賃貸契約や再就職のための手続きができなかったり、働き始めても、依存症などで生活リズムの立て直しや金銭管理が難しかったりして、安定した生活を維持できないことも多い。支援機関とつながり、市の「路上生活者等自立支援ホーム」に入所する人たちもいる。基本的な入所期間は90日ま

整え、訓練を受けて就労し、給与を積み立てて自立準備をすることも可能になってきている。

同グループは、相談窓口を常設している。また、日中の炊き出しを実施したり、洗濯・シャワー・ゆつくり過ごす会や、有償で街路や公園の清掃を行う仕事なども提供したりしている。さらに、食事を兼ねた自律支援セミナーの開催や、何も持たない状態でも入所できる簡易住宅の運営などもおして、暮らしの再建に向けたあと押しをしている。

「先日、14年前に居宅保護した家庭内暴力の被害経験者と偶然会って、いまは元気にやっていることを聞き、疲れが吹っ飛びました。支援の機会を踏み台にして人生をやり直してもらえたら、と思いながら取り組んでいます。それが無駄じゃないんだなって思えました」と今井さん。できることを、できるときに、できる方法で取り組んできたという同グループ。今後も、市民のボランティアと一緒に、路上の一人ひとりと向き合い、応援していく。



ミニホールでは一流の音楽家によるコンサートなどが開催されてきた

DATA

すがとよ酒店

宮城県気仙沼市新浜町2丁目3-6  
TEL : 0226-24-1111

## 鹿折に明かりを灯す酒店2階のミニホール

◎すがとよ酒店（宮城県気仙沼市）

ライター：熊谷智美

### ポイント

- 震災後の地元での店舗再建にこだわり、地域を盛り上げる一助となる
- 店舗2階のミニホールは催しものの機会や作業スペースに活用され、人びとの交流拠点になっている

復興工事のための大型トラックが行き交う道路に面して、なつかしい店構えの「すがとよ酒店」がある。1階は地元酒蔵の日本酒のほか、地域住民お手製の小物などが並び、2階はミニホールになっている。昨年はコンサートなど大きなものだけで17回もの催しが行われ、述べ800人が足を運んだ。

演奏者や曲目を目当てに訪れる人もいるが、「今日はなんだろう」と言いながら、催しのたびに誘い合って復興公営住宅から足を運ぶ常連もいる。ミニホールでの催しは、たいてい酒店の営業終了後、誰もが集える夜に開催される。夜のゆったりした時間を、仲間や知り合いと過ごすのを楽しみに来場する人も多いようだ。

### 地元こだわった店舗再建

「すがとよ酒店」は津波により全壊し、店主の菅原豊和さんを失った。豊和さんと店を切り盛りしていた妻の文子さんは、長男の豊樹さん、二男の

英樹さんと震災の約1か月半後に別な場所ので仮設店舗での営業を再開。震災直後は、複数の人たちから「小売店の時代は終わった」「別の生きる道を考えた方がいい」などと言われたという。それでも、鹿折に戻って暖簾を掲げるといふ強い気持ちで、プレハブでの営業を始めたと文子さんは語る。

震災後すぐ、以前から取引のあった飲食店から、酒類の販売を打診されたことも再開のあと押しになった。「こうした機会をもらったのも、仮設店舗で商売ができたのも、先代や先々代が鹿折地区で築きあげてきたものがあるからですし、地元の皆さんにお世話になってきたからです」と英樹さん。だからこそ、地元で再建し、地域の人たちの役に立ちたいと考えたという。

### 人が集える場所をつくる

鹿折地区に復興公営住宅ができてからも、商店などの生活インフラが十分ではないため、家に閉



「鹿折に戻って商売を続けながら地域を盛りあげたい」と話す菅原文子さんと英樹さん

鹿折に戻って商売を続けながら地域を盛りあげたいと話す菅原文子さんと英樹さん。菅さんは1919年創業の「すがとよ酒店」の店主として、地域の人たちを元気づけ、地域を盛りあげていきたいと考えている。

ミニホールは、週1回「鹿折ちくちく工房」の作業スペースにもなっていて、復興公営住宅で暮らしている70歳代から80歳代の7人

じこもりがちの人が少なくない。かつては「かもめ通り商店街」があり、特に夏のお祭りはにぎわった。イベントがあれば人が集まる。2016年12月オープンの新店舗にミニホールを備えたのは、その一役を「すがとよ酒店」でも担えないかと考えたからだ。

が、着物や帯をリメイクしたバッグや小物づくりをしている。ひとり暮らしのメンバード多く、お昼ごはんを食べるとおいしいね」という言葉が印象的だと英樹さんは言う。手仕事の楽しさよりも、仲間と集まっておしゃべりできることがよるこびであり、生きがいになっているようだ。

### 地域に根差して100年

ミニホールでの催しは、復興公営住宅の住民に告知する程度だが、口コミで席が埋まる。回数を重ねるにつれ、催しを楽しみに訪れる地域の人たちが増えてきた。

「すがとよ酒店」は

1919年創業。地域密着の商いを続け来年で100周年を迎える。鹿折地区は復興途

上にあるが、今後酒店として、地域の

人たちの元気づけ、地域を盛りあげていきたいと考えている。

山梨県立大学 人間福祉学部 福祉コミュニティ学科 教授

### 下村 幸仁(しもむら・ゆきひと)さん

県立広島女子大学大学院生活科学研究科修了。広島市の福祉事務所においてケースワーカーとして勤務したのち、会津大学短期大学部教授を経て、現職。専門は、生活保護と生活困窮者の自立支援。ケースワーカー時代から始めたホームレス支援は、現在も学生と一緒に続けている。また、東日本大震災以降、被災者支援も行っている。主な著書は、「格差・貧困と生活保護—最後のセーフティネット」の再生に向けて(共著)、「医療・福祉総合ガイドブック」(共著)など。



## 専門家に聞く地域づくりのヒント

### やさしいともしびを

私たちに住む家があります。その家のない状態を狭い意味で「ホームレス(路上生活者)」と呼んでいます。しかし、それは単に家という物質がない状態の「ハウスレス」を指しているにすぎません。そうでなければ、大震災で住居を損失した人や福島原発事故で放射線被ばくによりふるさとを追われた人たちは「ホームレス」になってしまいます(現にそう表現する者もいます)。ところが、ホームレスのもう一つの要素である精神的なものとのつながり(関係性)が希薄か喪失した状態がとても重要です。

「仙台夜まわりグループ」は、ゆえあって公園などの公共空間で生活せざるを得ない人たちに対して、温もりのあるおにぎりや味噌汁などを持ってふれあいを深めています。それは彼・彼女たちの暗い生活に灯りをともすものであり、生活の再建に向けて社会との関係性を再構築する機会ともなっています。しかし私たちが忘れてはならないことは、震災直後、「ホームレス」の人たちが同じ被災者なのに炊き出しに参加し、生きる希望を与えたことです。被支援者が、支援者にもなり得ることを自ら体現したことは、すばらしいことだと思います。

多賀都市の「八幡下二地区防犯協会」は、住民の自主的な防犯組織であり、活動内容は下校中の子どもたちの安全を見守ることと、防犯・防災知識の普及啓発です。災害や

事故は、社会的に弱い立場にある障がい者や子ども、高齢者などに大きな被害を及ぼします。だからこそ、それらを未然に予防する取り組みが地域のなかで必要とされています。

気仙沼市の「すがとよ酒店」は、100年の歴史をもつ、地域に根差してきた老舗であり、店主自らが被災者です。被災した人たちは、避難所から仮設住宅、復興公営住宅へと移転するなかで、かつてのコミュニティ、そしてそのつどの人間関係が崩れていくまちの姿を見るにつれ、「人が集える場所」の必要性を感じています。そうしたなかであって、店は、復興公営住宅で生活するひとり暮らし高齢者たちの閉じこもりを防ぐ「居場所」となっています。「みんなで食べるとおいしいね」という言葉からは、孤食を避け、他者との会話において聴覚からおいしさを感じるという関係性の重要さが伝わってきます。

この三つの事例の共通性は見えにくいですが、人とつながることで地域コミュニティの再生が可能であること、そして人に寄り添った信頼関係を構築することで地域コミュニティへの復権ができることを示しています。私たちは、他人の困りごとを丸ごと自分のこととしてとらえることはできませんが、他人の困りごとを自分だったらどうしてもらいたいかは考えることができます。私はこれを「他者性の内在化」と呼んでいます。そうすると、あなたも自分の住むまちに灯りをともすひとりになれるのではないのでしょうか。



DATA

かほく  
ベルリンガーズ・アンダンテ

活動日：毎週金曜日

午後1時30分～3時30分

拠点：河北総合センター「ビッグパン」

(宮城県石巻市成田字小塚浦畑54)

TEL：090-2228-7800 (代表 今野)

60回目

市民リレー

# 東北の元気

今回は...

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

## 重なり合う豊かな時間

かほくベルリンガーズ・アンダンテ (宮城県石巻市)



重なり合うハーモニーと笑顔

かほくベルリンガーズ・アンダンテの皆さん。左から二人目が代表の今野智子さん。中央が指導する須田美知子先生

ベルを寝かせて内部のクラッパー(振り子)を指で弾く奏法はブラックと呼ばれる

「かほくベルリンガーズ・アンダンテ」は、宮城県石巻市で活動しているハンドベルグループだ。同市の河北総合センターで、毎週金曜日、40歳代から60歳代の女性8人が練習に取り組んでいる。参加者は、「音色に癒される」「皆の息がバッチリ合うと楽しい」と魅了されている。年に数回は、かほく文化祭などのイベントに出場し、市内のデイサービスや幼稚園でも訪問演奏をして、練習の成果を発揮している。

8人のメンバーが、ピアノの鍵盤における2音ずつを分担し、2オクターブをカバーする。一人欠けても成り立たないのが、難しさであり、良さである。奏法ひとつとっても、細かく振り続ける「シェイク」や響きを消す「サムダンブ」などさまざまなあり、奥が深い。

練習時には、日本ハンドベル連盟所属の須田美知子先生の教えを受けている。「先生のご指導がすごくいい。打っただけで精一杯だったのが、最近は強弱や音色も考えた練習ができています。上達が楽しみです」とメンバー。

ハンドベルの音は、柔らかく温かみがあって、澄んで上品だ。そして、それはそのままメンバーの雰囲気でもある。練習は、真剣ななかに時折笑いも交え、和やかに行われる。休憩中はコーヒーを片手に談笑。世間話は

もちろん、民生・児童委員も務めるメンバーのひとりに家族の相談が寄せられるなど、ちょっとした相談や情報交換の場にもなっている。「いろいろなお話ができて楽しい」と皆口をそろえる。「他県から嫁いで来てさびしかったけれど、お友だちができた」と話す人もいる。

各地での訪問演奏は、はじめて聞くハンドベルが新鮮で、とてもよこんでもらえるという。演奏のたびに新曲に取り組み、レパートリーは50曲に上る。昨年は、宮城県ハンドベルコンサートで、団体の垣根を越えた合同演奏にも初挑戦し、楽しんだ。

震災後に被災地支援の一環として、日本ハンドベル連盟から河北文化協会にハンドベルの寄贈があり、2011年3月から避難所などでハンドベル体験教室が開催されてきた。代表の今野智子さんによれば、「いただいたハンドベルを活用したい」とハンドベルの音楽を広めたい思いから、教室に通う仲間と12年9月にグループが結成された。

団体名の「アンダンテ」は、「歩くくらいの速さ」を表す音楽の速度標語からきている。「皆さんのペースでゆつくり楽しくやっていたら」と今野さん。ゆつたりと流れる癒しのひととき。重なる音色は耳にやさしく、心地良い。

# 平成30年度 宮城県サポートセンター支援事務所の活動

東日本大震災後、被災市町村では、被災者の生活を支援するために個別訪問や相談・調整、地域支援を行う「支援員」を多様な形で配置し、県内で最大時に約800人が従事。現在、災害公営住宅や防災集団移転地などへの支援も含めて約250人が活動しています。

宮城県では、支援員の活動をバックアップするために、2011年9月に「宮城県サポートセンター支援事務所」を設置（宮城県社会福祉士会が運営受託）。災害公営住宅などへの本格的な転居期を迎え、今年度も協力団体と協働しながら、地域の福祉力を基盤とする福祉コミュニティの形成を目指して取り組みます。

## 平成30年度重点目標

### 被災地における『地域共生社会実現』に向け、 「(地域)福祉の推進」のための体制整備、基盤整備を進めていく

#### ①被災市町における、互助によるコミュニティ再生を推進するための基盤整備と支援体制の構築に努める

・地域福祉（活動）計画の策定を進めるとともに実施に向けた基盤整備・体制整備を応援。  
・日常生活圏域内において、医療、介護、住まい、生活支援サービスが切れ目なく、有機的かつ一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築も視野に入れて取り組む。

⇒住民組織、当事者組織の主体的な「互助」活動をバックアップしていく「平時のサポセン機能」を提案。

（地域共生社会実現の推進役たる、住民主体の「支え合い」を醸成・協働し、地域力を強化）

⇒宮城県版『地域共生社会実現推進本部』（仮称；平時のサポセン支援事務所機能）の必要性、在り方について検討。

⇒住民の互助機能で「我が事」「丸ごと」の実践を、住民の孤立防止等を中心に地域コミュニティの強化を図りながら行う。

#### ②地域の福祉力醸成のため、多様な地域人財の育成に努める

・「包括的な支援体制構築」「住民が主体的に地域課題を把握し解決を試みる体制づくり」に呼応したソーシャルワーク機能を有する多様な人財の養成。

・地域福祉コーディネート研修を体系化し、多様な地域人財や専門職等がともに学ぶプラットフォームでの研修を目指す。

・自助・互助が行いやすい環境づくり。そのためにも「地域力」「仲間力」を高める形で地域人財を育てる。

#### ③地域福祉の推進に向け、地域ごとに必要なネットワークを構築し、住民を中核にしたプラットフォームでの協議を活かし、協働化（役割分担）した体制づくりをあと押しする

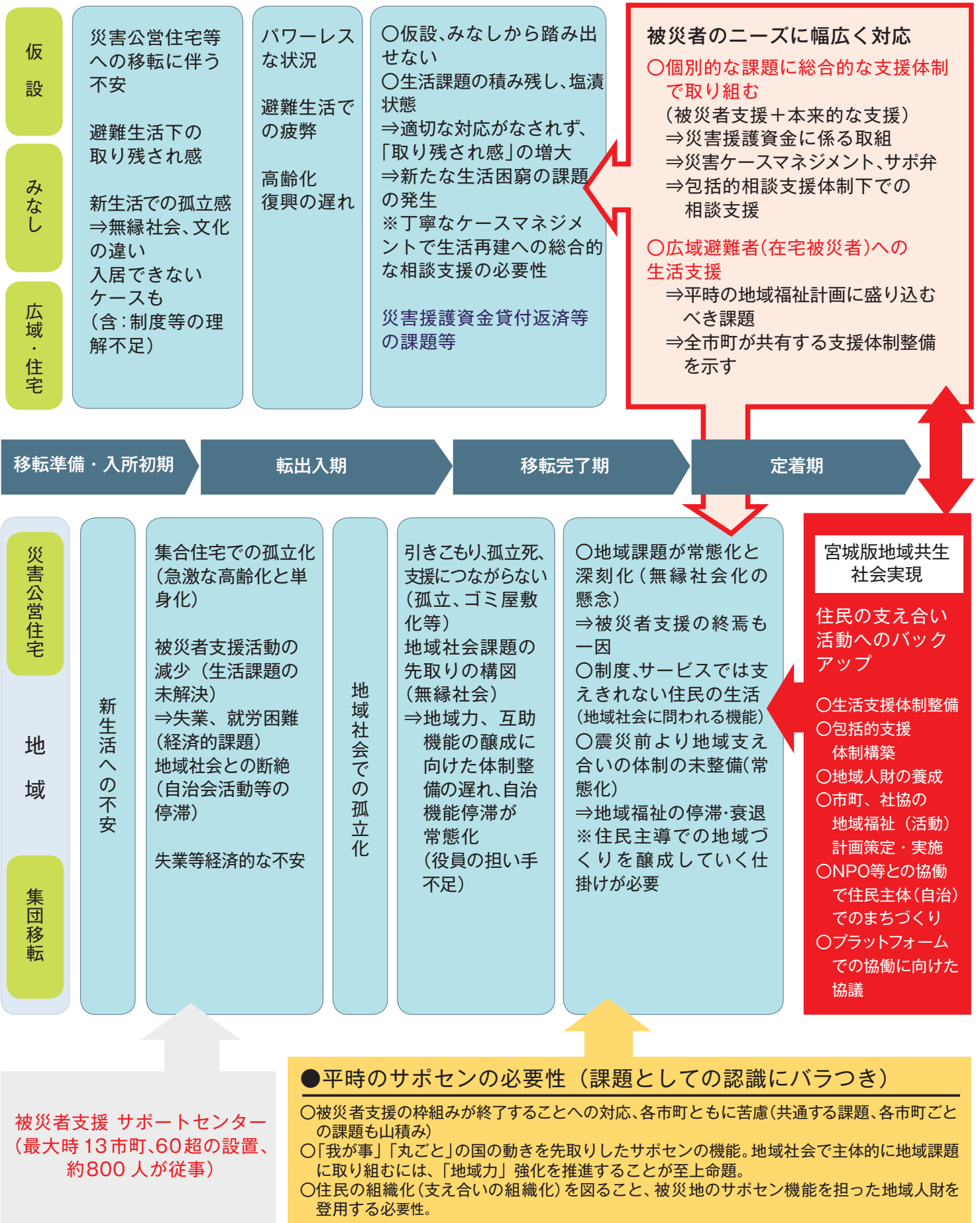
・日常生活圏域（小地域）での支え合いについて、①居場所づくり、②見守り支援、③生活支援の各段階について、各市町の実情と支援体制に配慮しつつ、社協・NPO等の支援者と協働してサポートしていくネットワークを構築。

・必要なケアの情報が得られるワンストップの横断的総合相談窓口を互助機能として、包括的・継続的ケアマネジメント、虐待防止、権利擁護等の機能が最大限に発揮できるよう、各制度や各専門職等の包括的支援体制を地域福祉において融合し、住民の意思決定支援（地域の意思決定支援も）における役割を担うことで、包括的支援体制の基盤整備を行う。

# 平成30年度宮城県サポートセンター支援事務所事業

## 各フェーズでの課題と支援策：支援事務所が担う役割とミッション

宮城県サポートセンター支援事務所  
事業計画書2018.4.1-2019.3.31



# どごごでもサロン

第1回

自然なつながりと支え合いを生み出す



## 集落行事は支え合いの基盤

### 全戸参加の「大般若講」

福島県猪苗代町・会津若松市

民間信仰の伝統的な枠組みとしての「講」は、東北地方の、特に農村集落では、比較的良好に受け継がれている。

観音講、山の神講、天神講など多くの種類があり、成員は女性または男性だけ、あるいは特定の世代だけに限定するものや、老若男女を問わず各戸の代表が参加するものなどさまざま。たい

ては、一定の年齢に達するなどして自動的に成員となる。宗教的な枠組みといっても、子ども会や婦人会といった地縁組織に近い。

まず神仏に祈りを捧げ、そのあと飲食をともにするというのが、おむね共通の形式。会場として寺や神社、集会所などのほか、輪番制で成員の自宅が用いられることも。開かれる回数は、少ないもので年1回、多いものでは月数回。

福島県猪苗代町の戸ノ口地区で4月10日、「大般若講」が開かれた。戸ノ口と隣接する三本木、金子沢、それに会津若松市戸ノ口の4集落が合同で行う、毎年恒例の講だ。雪解けが進み、農作業が始まろうという時期、僧侶を招いて家々や集落の安全・繁栄を祈る。原則として全戸参

加で、今年は乳児から高齢者まで計24人が集まった。ちなみに4集落の人口は計35世帯117人で、高齢化率は38・5%（3月末時点）。

集会所の床の間に、釈迦如来の掛け軸が掲げられる。灯明がともされ、お供え物が置かれる。

午前11時、講が始まる。参加者は車座になって長い数珠を持ち、祈りながら手から手へと繰り回す。

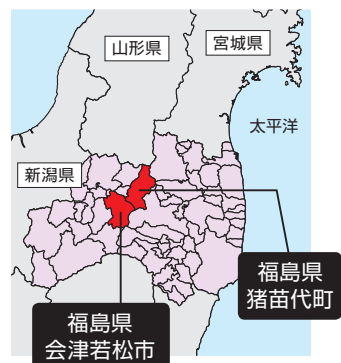
続いて僧侶が「大般若経」を転読。最後に全員で焼香すると、ちよつと正午ごろとなり、宴会に移る。

参加した森川キミ子さん（85歳）は、「集落の人たちみんなが集まって祈りして、食べて飲んでおしゃべりして笑って過ごす。それがとても楽しい」と話す。

大般若講は年に1度だけだが、同様の伝統的な行事や共同作業など、地区住民が集まる機会は月に1度はある。

戸ノ口の区長、渡部隆さん（61歳）は、「こういう集まりを通じて横のつながりがつくられる。つながりがあるから支え合いもできる」とその意義を強調する。

こうした行事は、事実上の「サロン活動」と言える。福祉的な目



的のサロンがないとしても、実は地域には多様な「交流サロン」がある。集落行事と地域福祉は、暮らしのなかで混ざり合っている。木



## 花守と産直が「元気の源」 紅枝垂地蔵桜保存会

福島県郡山市中田町

「花守」——桜の番人のこと。春の季語でもあり、芭蕉も「二里はみな花守の子孫かや」の句を詠んでいる。

福島県郡山市のJR郡山駅から東へ約16キロの中田町木目沢地区。市指定天然記念物の紅枝垂地蔵桜がある。里山にたえず樹齢400年のしだれ桜は、毎年4月半ばに見ごろを迎え、多くの人を引きつける。

紅枝垂地蔵桜保存会は、地元の農家9戸で運営する花守団体。地蔵桜の手入れや周辺の草刈り、駐車場の管理などのほか、春季限定で産直店を開く。

産直店はパイプハウスで設営。地蔵桜が開花する4月10日前後から1か月あまり営業する。期間の途中で桜は散ってしまうが、入れ替わるようにハナモモが咲き誇る。集落道路や里山のあちこちに地元住民が植えたハナモモがあり、散策路も整備されている。ハナモモ目当ての花見客で、産直店のにぎわいも続く。野菜よりも草花や花木の苗が人気だ。

「花がたくさんの人を呼んでくれる。この雰囲気が好き。産直はたいへんだけど、やりがいがある」と話すのはメンバーの一人、草

野タマ子さん（81歳）。86歳の夫とともに保存会の活動に取り組み。「私も夫も介護の世話にもならず、元気に幸せに暮らしている。その秘けつが保存会だ」と笑う。

20年ほど前、脳梗塞を患った。今も定期的に医師の診察を受ける。

「医者からは『畑と産直をやっているから元気なんだ』と言われる。だから、畑も産直もできる限り続けるよ」（草野さん）。

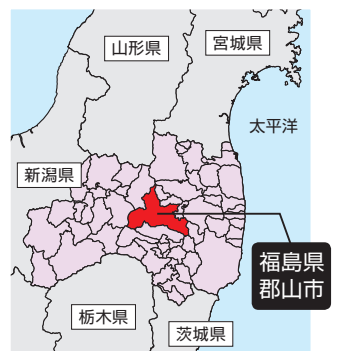
保存会の結成は1995年4月。今年で23年目を迎えた。

「メンバーが高齢化するなか、活動をどう維持していくかが課題」と会長の宗像清さん（71歳）。年齢層は60歳代前半から80歳代後半で、中心は70歳代になっっている。

「高齢でも、たとえひとり暮らしになっても、仲間同士で力を合わせて、少しでも長く保存会の活動を続けられるようにしたい」（宗像さん）。

桜花の下に人びとは集う。語り合い、ときに杯を交して春の到来を喜ぶ。花は人をつなぎ、元気づける。

花見は、世代と地域を超えて展開されるサロン活動だ。花守た



ちはいわばサロンの世話人であり、その恩恵を最も享受する参加者でもある。木

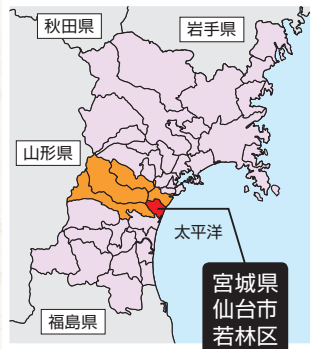


# まじわる！ 集団移転 & 災害公営住宅

第33回

## ゲートボールで災害公営住宅 の入居者が日常的に交流

荒井東ゲートボール愛好会  
(宮城県仙台市若林区)



手前が91歳の参加者。熟練の「技」を見せる

青空の下、朗らかな笑い声が響く。荒井東市営住宅では、入居者たちが、毎週月曜日と金曜日の朝9時30分から、庭でゲートボールを楽しんでいる。「笑顔で健康増進、元気アップ！」をスローガンに活動している荒井東ゲートボール愛好会だ。会員は11人で、平均年齢は81・5歳だ。かくしゃくとした最高齢の91歳の女性参加者は、ゲートボールのベテランで、初心者に手ほどきもしている。「皆で大きな声を出して、

笑い合っている。皆さん、本当にいい人。親しくなると、こういうことができると感謝している」と、にこやかに語る。性別、年齢を超えて、一緒になって遊べるのがゲートボールというスポーツのポイントだ。

ゲームは、打順と同じ番号のボールをステイックで打ち、3つのゲートを通してゴールボールへ当たれば、「あがり」だ。10人が赤・白二組に分かれて、得点を競う(1人が交代で審判を務める)。また、自分のボールを相手のボールに当てる「タッチ」「スパーク打撃」などもあり、相手の動きを読む戦略性の深さも魅力だ。「思うようにいったときはうれしい」と会員。勝負ごとの楽しみがあり、特にチーム同士は助け合いうなかで、絆が深まるという。愛好会会長の大橋公雄さん(74歳)は、住宅で発足当時の町内会会長を務めていた(本紙28号参照)。公益財団法人日本ゲートボール連合から、ゲートボール用品の寄贈を受けたことをきっかけ



休憩中のちょっとした世間話も楽しみのひとつ

に、2015年から愛好会を始めた。「青空の下でおしゃべりして、身体を動かして、一日楽しく暮らせるように。健康寿命を伸ばして、充実した心身で楽しい人生を送っていただきたい」と目的を話してくれた。

会員は、「パワーをもたっている」「健康的になるよね」「アハハッ、オホホッと笑ってね」「若返る」「頭も使うんだ」「目標は100歳まで」と口ぐちにその魅力を語る。ふだんから会員同士で、お互いの家でお茶飲みをすることもある。ときどきは、飲み会も開いて、親睦を深めている。先日は、皆でバラ園に出かけて、バラを觀賞しながら食事を楽しんだ。

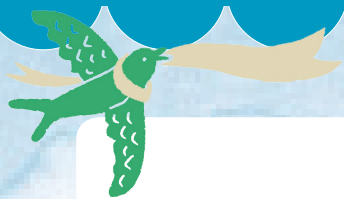
朝から皆でゲートボール。そのあとはお茶飲みやお散歩。集会所でも、グッズなどさまざまなサークル活動が行われていて、自分の好みを選んで参加することができると。子どもたちが学校から帰ってくれば、庭でサッカーやキャッチボールを始める。そうした光景を眺めているだけでも、元気をもらえると。11階建ての住宅の最上階からは、海・山・市街地が見渡せる。晴れた日には、そこからの見晴らしを堪能するのもいい。

14年4月(1号棟)・15年4月(2号棟)の住宅入居開始から、3年以上の月日が経つ。日々の生活に落ち着きと楽しみを感じられる人たちが増えてきている。



住宅11階からの眺望

# 宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ



## サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

### 老いたワーカーからの遺言(その3)

「我が事」「丸ごと」は、「他人事」?

老兵にしてみれば、いまの若いワーカーは優秀です。働きながら、自らのスキルアップに、研鑽に励む姿をよく見ます。社会福祉士会の生涯研修、結構ハードで、お金もかかったりして、若いときは「自分への投資」と想えとよく言いますが、私なら別なところに投資したい(こんなことを書いたら、また社会福祉士会に怒られそう)。

ワーカーのスキルアップにつながる研修、ワーカーとしての理想に近づけるとすると受けるか?と言うと、それでも違うと思う。むしろ、寅さんの映画を観て、自らがもつ「弱さ」や「愚かしさ」に気づけると、「得」を得た気になる。寅さんの恋愛教室を観て、「寅、早く迫れ!」といま一步踏み出せない寅さんにイライラする観客、そのヤジに「できないから、寅や!」と反論する声。こんな映画、ほかにはない。「惚れることは、自分にとって最高の幸せ」という寅さん、一方で「恋愛関係になってしまうと、相手にとって不幸」が見えてしまう。恋は成就してこそ意味があると思う人たちにはわからない世界。数多くの失恋を肥やしにしてきた寅さんと私(?)。懲りていないので、少しも肥やしにはなっていない気がするが…。でも、寅さんの好きな女性に対する距離感、ワーカー的には絶妙だと思います。「間違えたり」「好ましくない対応」に陥ったときに、軌道修正が可能になるような距離感もっている。人の心根に土足で踏み込むことはしない。しかし、「我が事」「丸ごと」を「他人事」にはしない。

ここで想うことは、「我が事」「丸ごと」は、専門性にとらわれるワークではなく、日々の生活を共有しつつ、「他人事」では片づけられない『市井』の生活のなかで得られるもの。だから、弁護士も災害ケースマネジメントにおける取り組みも、アウトリーチ(訪問支援)を基本にしています。生活に係る課題を共有していくには机上での仕事ではなく、間違いながらも現場で寅さん流の距離感で経験を積みあげることが大事なよう。ただ、学ぶことを否定はしません。教養のための知識ではなく、自分らしいワーカーであろうとするためなら。

## ひとりごと

サポーターのあなたへ

宮城県サポートセンター支援事務所  
アドバイザー 浜上章



### “経験”を経て、地域で生きる。

震災の前、そこには確かな暮らしがあった。家族との、地域との、祭りや行事、役割やつながり、営みがあった。その地域の風景や佇まいがあった。

津波はあまりにも多くの人、物、つながり、営み、ふるさとを奪っていった。

悲しみを抱えつつ、被災者支援の仕事に就いた人たちがいた。宮城県内だけでも一時、60を超えるサポートセンターが設置され、800人近くの支援員が雇用された。(2013年:宮城県サポートセンター支援事務所調べ)

支援員は、仮設住宅に入居するひとり暮らし高齢者など孤立しがちな人、生活に困難を抱える人などへの個別訪問や集会所でのお茶会開催などに奔走した。訪問を拒否されたり、嫌な顔をされることが幾度もあった由。それでも、めげずに繰り返し訪問し、徐々に受け入れられ、話をしてくれるようになる。そのうち訪問を心待ちにしてくれる人が増え「いつも気にかけてくれてありがとう」と笑顔で迎えられるようになった。

震災前には、ひとり暮らしの人のことや生きづらさを抱えた人のこと、地域のことを気にかけてこともなかった支援員も多かった。しかし、何度も訪問し、いろいろな悩みや話を聞き、サポートセンター仲間と気になる人に思いを馳せ、支援のあり方を何度も話し合ってきた。そうして、被災者が身内のような、自分のことのような親しい存在に思えてくる。

時間が経ち、被災者の新たな住まいでの暮らしが落ち着きはじめ、いくつものサポートセンターが閉鎖された。多くの支援員が職を辞して、元の仕事や新たな仕事に就いたり、地域に戻った。被災者支援に携わった支援員のことを、「地域福祉の、福祉の貴重な人財としてなんとか次に活かすことはできないか?」と、多くの関係者が心悩ます。しかし、仕事として活かす道は限られているのが現実。

支援員の多くの人が、職を辞したあともかかわった被災者のことや地域のひとり暮らし高齢者のこと、孤立しがちな人のことを気かけ、声かけなどなんらかの地域活動に関心を寄せ、力になりたいと思っている。ひたむきに被災者支援、地域の復興に携わってきた人にとって、「地域」は、震災前の地域とは明らかに違って見えてきているはず。震災による経験が、被災者支援の経験が、見るもの、感じるものを明らかに進化させているはず。経験を仕事として活かせなくても、地域で生きる一人の人間として、地域に暮らす人たちのことを気かけ、見守りや助け合い、お茶会などの集う場を支援することは、きつとできる。

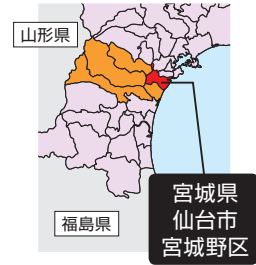


交流会は、参加者も意見を出し、動きながら形づく

## 暮らしを支える支援員31

### 避難者支援の受託終了も、 定着支援を継続

一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム  
(宮城県仙台市宮城野区)



5月30日に、「一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム」が「ふくしま仙台駅前サロン」という交流会を開催。参加対象は、東日本大震災をきっかけに福島県から宮城県に移り住んだ人たちだ。今回は浪江町出身の12人が、なみえ焼きそばの調理や会場近くの神社へまち歩きをするなどして親睦を深めた。

浪江町では、震災発生時の福島第一原子力発電所事故の影響で、町内全域に避難指示が出され、当時およそ21,500人いた町民は県内外に分散避難した。町は2012年度より「復興支援員事業」として、最大10府県の支援団体に拠点となる事務局を委託・設置して、現地で雇用した支援員を配置。転居先の地域ごとに、戸別訪問、つながりづくり、情報発信を行い、暮らしの再建のあと押しをしてきた。同コンソーシアムは、13～16年度に全国で活動する同町支援員と各拠点の運営調整を担い、14～17年度には、宮城県に配置された北海道・東北地方担当の支援員たちの拠点として、日常業務のマネジメントも並行して行ってきた。

17年3月末に帰還困難区域以外の避難指示が解除となった同町は、18年3月で支援員の常駐拠点を閉鎖し、支援員の活動規模も縮小。同コンソーシアムでは、宮城県に移り住んだ人たちが、出身地のつながりをた

いせつにしながら、定住先での自律的なコミュニティをもつところまで支えることが必要だと考え、独立行政法人福祉医療機構の助成を受け、浪江町以外からの転居者も対象に交流会を継続していくことに。目標は、移住者同士が支援団体を介さずに直接やりとりできる関係づくりだ。参加者からは、「歳をとってから近所の知らない人となじむのはたいへん」「同じまちの出身者同士なら、共通の話題ももてる」「こうして互いに顔を見れると安心」という声が聞かれる。同じ町の出身とは言え、宮城県に移り住んでから知り合った仲も多いが、声をかけ合って、女性3人でお茶飲みをしたり、男女8人で飲み会をする人たちもいるという。

「宮城県では県外からの避難者の受け入れ体制が不十分だった。日常生活で立ち寄れる場所を増やすなどしながら、いまいる場所への定着の支援に力を入れたい」と事務局長の高田篤さん。15～17年度に支援員を務め、移住者の継続的支援のために今年度から同コンソーシアムのスタッフになった村田直子さんも、「交流会参加者同士、長くつきあってもらいたい」と語る。清

**DATA** 一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム  
〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡2丁目3-15 花本ビル601  
TEL 022-353-7550

#### ☆次号予告 特集「農・林・水産業と支え合い」

#### 平成30年度 宮城県生活支援コーディネーター養成研修

##### <基本研修1 初級研修>

- 【気仙沼会場】6月28日(木) 宮城県気仙沼保健福祉事務所
  - 【石巻会場】7月6日(金) 石巻商工会議所
  - 【栗原会場】7月18日(水) 宮城県栗原合同庁舎
  - 【仙台会場①】7月19日(木) 仙台市福祉プラザ
- 講師：高橋 誠一(東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授)  
池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

### 購読者を募集しています!

#### 「月刊 地域支え合い情報」を年間購読しませんか?

購読会員 年3,696円(年12回、送料込み)

購読ご希望の方は下記口座へお振り込みください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。

- ◎お振込先 ●ゆうちょ銀行振替口座
- 口座番号：02260-9-46303
- 加入者名：全国コミュニティライフサポートセンター

※通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、

- ①お届け先の住所 と ②何号からの購読申込み
- を記入してください。

#### 読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ(地域づくり)から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

68号では、震災を機に転居した人たちの集まりについて紹介された特集記事特に興味深く読みました。同郷出身者だからこそ距離を縮めやすいことや、隣近所でも頼れる関係もあるのだということに改めて感じました。故郷のつな力は大きいですね。(仙台市宮城野区S・S)

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください!  
TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737  
E-mail joho@clc-japan.com

#### 編集後記

取材・執筆期間中、ボランティアの一員として、夜まわり活動に3回参加させていただきました。専門的知識がない自分にもお手伝いできることがあるのだと実感できましたし、いつもと違った角度から見るまちは新鮮で、いろいろなつながりの形が見えました(清野)